
ウィークエンド

稲穂 約仕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィークエンド

【Nコード】

N2080C

【作者名】

稲穂 約仕

【あらすじ】

采並市に在る高校に通う高校2年生、岩城匡倅まろゆきはある日、妙な少女と出会う。少女は匡倅にこう言い残す、『あなたは知る権利も忘れる権利もあります。あなたは知りたいですか？世界の真実を…』
匡倅はどう答えて良いのか分からず、立ち尽くしていると…

第一話 日常から…

それは覆いなる罪なり…

それは覆いなる怨みなり…

それは覆いなる災いなり…

それは覆いなる怒りなり…

それは覆いなる憎しみなり…

それは決して開けてはならない箱

決して使ってはならない破滅の器…

決して…

…

…

…

…

生きている者は誰もが必ず夢をみる、夢は人や動物にとって大切な整理現象で、夢を見なければ生き物は脳がパンクしてしまい、最後には死んでしまう…
故に、生き物は夢をみるのだ。

だが、夢から覚めればそれは霞のように消え去り、後には欠落した自分が居るのだ…。

だから人は夢を追い求める、はかなくも小さな夢を…

「なあ、岩城そろそろ帰ろうぜ。」

武道館の入り口で野崎 真弐が俺に声を掛けてきた。

「ああ、そうだな…」

俺は軽く相づちを打ったが、竹刀を振る手を休めなかった。

「明日が都大会の試合で気持が逸るのは分かるが、あまり根をつめるのは良くねえぞ？」

「…今何時？」

俺は竹刀を振りながら野崎に時間を聞いた

「丁度7時」

「7時か…腹減ったしそろそろ帰るかな」

「それじゃあ校門で待つてるからな、早く来いよ」

「ああ…分かった」

野崎は後ろ手にひらひら手を振りながら武道館から出ていった。

着替を済ませた俺は、部室と武道館の鍵を掛けると野崎の待つてる校門に向かう事にした。

本来なら今から事務室か職員室に鍵を届けなければならないのだが…

「面倒だから明日で良いか…」

手に持っていた鍵をポケットに押し込むと、俺は校門に急いだ。

「野崎お待たせ…って居ねー！」

辺りを見渡すが野崎の姿は見当たらず、仕方なく近くに在った公衆電話から野崎の携帯に電話する事にした。

《もすもす、野崎ですけど…》

「……………」

《……………岩城か？》

「今、どこ居んだ」

《MAC》

「なぜ英語」

《いやな～お前待ってる間、暇だったからさ…》

「どうせナンパでもしてたんだろ…」

《……………》

「って、図星かよ!!」

《あ、あれれ？電源が…ブチ、ツーツ…ツーツ…》

「あの野郎切りやがった…」

俺は受話器をフックに掛け直し、腕時計に目をやる。

「7:30か…コンビニで何か買って帰るかね～」

俺は自分の腹を満たすため学校のふもとに在る、コンビニへ行くため学校の坂を下り始めた…。

時は…動き始めた…

ゆっくりとはあるが、確な音を響かせながら…

第一話 日常から…（後書き）

よかったですら感想ください。

第二話 拳銃と指輪（前書き）

二話め

第二話 拳銃と指輪

「おつ 匡倅まことゆきじゃないか、どうしたエロ本買いに来たのか？
生憎うちには置いてないよ」

女性が口元に笑みを浮かべながら俺に話掛けてきた。

「何言つてんだよ久姉！腹が減ったから菓子パンでも買おうとおも
つて来たんだよ」

「な〜んだそんな用か、面白くないねえ」

ここは、学校のふもとに在るコンビニ【ハギワラ】。

そして、今俺と話ている人が萩原 久恵ひさえここハギワラのオーナーだ。
久姉の家と俺の家は遠縁に当たり、昔からよく面倒を見てもらた。

「ところで匡倅…あの変な力どこまで押さえられる様になった？」

久姉はいつの間にか真面目な顔付きに成っていた。

「そうだな…20〜40つてとこかな」

そう答えると久姉は手にしていた物を投げて寄越した。

「ガチャガチャのカプセル？」

これがどうかしたのか？」

「これにヒビを入れてみな、壊すのではなくヒビを入れるだけだ簡
単だろ？まあ、昔のお前はそれを潰したけどな。」

俺は苦笑いしながら手の中にあるカプセルを見つめる。

俺は右手でカプセルを握ると…

鈍い音が辺りに響き渡り、暫し沈黙を落とした…。

「まだまだじゃねーか！クソガキ！！」

何処から取り出したのか分からないが、久姉の手には鈍く光る拳銃
が握られていた。

「ちよま…」

「うるせえ!!」

夜のコンビ二に銃声が轟いた…。

俺は細く入り組んだ道をパンをかじりながら歩いていた。

「ハハ八時間が時間だけに誰もいねえや」

多分時間帯にも問題もあるが、大きな要因はこの通りが切り河通り
と言うことだ。

ここでは3ヶ月前から通り魔殺人事件が多発している場所で、つい
二日前も男性が一人刺し殺されたばかりだ。

「いや」それにしても物騒な世に成ったも…ん?何だあれ」

道端に何か落ちているのに気付き、歩み寄り拾い上げてみた。
とても質素な造りをした、なんの変鐵のないただの指輪。

その筈なのだが、何か引き付けられる…そんな感じの指輪だ。

「だけど…」

所々錆びたり欠けたりしているため、どうするべきか決め兼ねた俺
は取り合えずその指輪を家に持ち帰ることにした。

第二話 拳銃と指輪（後書き）

か…感…想を…

第三話 日課…

《ただ今、留守にしています。御用のある方は発信音の後に名前と御用件を…》

俺はまず家に帰ると必ずする事がある、それは留守番電話の用件を聞く事とを必ず行っている…言わば習慣である。

《用件一件です》

『ヤッホー、マーちゃん元気にしてるかな？母さんよー！』

一際明るい声が電話から流れ始めた。

『今、母さん達はドイツにいるの。』

「…ドイツか」

『それでねマーちゃん早速んだけど、明日いらない荷物が届くから片付けといてね。』

「マジかよ…」

二、三ヶ月前にももらない書類や資料…向こうでの生活道具などが段ボール20箱に入れられ贈られて来た時は、嫌気がさすほどだった。

『あつ、それとお誕生日おめでとう匡倅』

そう言えば明日は俺の誕生日だった。

『贈った荷物の中にプレゼントも入ってるから、それじゃまた時間のある時に電話するわね。バイバイ』

『ちょ、パパも…しゃべり…グハ』

《再生が終わりました》

「…親父も元気そうだな」

俺は明日の大会に備え早めに休むことにした。

…

…

…

…

…

2 3 : 3 2 …

切り河通り…ここを中年のサラリーマンが歩いていた。

「あのクズ部長め！俺が使えない奴だ、なんだぬかしやがって！！」

上司への不満を爆発させながら…

「あんなクズ死んじまえば…ん、なんだ？」

男は立ち止まり、目を擦る…この時、男は大量の酒を摂取していたため幻覚でも見たのかと思ったのだ。

「秋村…部長？」

しかし、幻覚ではなかった。

道の真ん中に、血の水溜まりに仰向けで倒れている男は、確にこの

男の上司に当たる男だった。

男はゆっくり、ゆっくり近付く……

「し、死んでやる……」

秋村は体から大量の血をたれ流し死んでいた……

「一体……誰がこんな事を……」

彼方が望んだ事じゃない。

!!

男は不思議な声驚きに振り替。

遅いわよ……オジサマ

振り替えると同じに強靱な力で頭を鷲掴みにされ、それと同じに腹部に鋭い痛みが走つる。

男は指の間から腹部に刺さっている物を見た、それは…鈍く光る…

「うあゝ あああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ」

男は激痛に耐えきれずに情けない声を上げた。

うふふ…良いわーその歌声…
ゾクゾクする

「はっ…はっ…な…何が目的だ…か、金か？」

金？そんな物要らないわ…

「じ、じゃあ…何が…」

それはね…

声は静かに、そして残酷に目的を告げる。

「え？」

だが、男は良く聞き取れなかった。

いや、聞きたくなかったのかもしれない…

バイバイ、オジサマ…

驚掴みにされていた頭に、更なる力が込められ…

グヤリ…と言う鈍い音…

そして、吹き出す赤黒い…血液…

はあああ…

なんてあつけないんでしょう…

つい先ほどまで動いていた男は頭から血を噴水のように吹き出していた…

…

…

…

…

…

⋮

第三話 日課…（後書き）

いやー毎日暑いですね…

私的には夏より冬の方が好きですかねー

冬になれば何かと美味しく頂ける物が多いから好きですねw
では今回はこの辺で…

P、S

気が向いたらで良いので感想待ってますw

第四話 大会当日…

…

…

…

…

…

…

【私は、平和と言う化け物に全てを奪われた…】

弱々しく、無気力な声…

【私の居場所、私の家族そして…】

声は言葉に詰まりながらも言葉をつむいで行く…

【私の愛しき人さえも私から奪っていった…】

声は震えていた、それは恐怖ではなく…ただ純粹に怒りだろう…

【ならば…】

声は、いつの間にか決意を固めた強い口調に変わっていた。

【ならば…私は、今ある現実を打ち砕き…

私の理想郷を打ち立てるための礎としよう…。】

.....
.....
.....
.....
.....

A M 6 : 0 0

岩城家

匡倅は居間で朝食を取りながらテレビを見ていた。
今朝のメニューは、スクランブルエッグ、トースト、珈琲……と言っ
た少し軽めの食事である。

『メロン商法で5人の重計傷者が出るなど各地で……』

「最近物騒だな……」

俺は珈琲をすすりながら、チャンネルを変える……

『では、次のニュースです……』

采並市、采並町の住宅街で二人の男性の遺体が発見されました。
殺害されたのは……』

また殺人か……

切り河通りといい、最近本当に物騒になった。

『現地に長倉キャスターが行っています、長倉さん……』

やはり殺人事件があった場所は、切り河通りだった…

『…の話によりますと、凶器は鋭く上がった刀剣類とみられており…』

俺はテレビを消すと、食べ終わった食器を台所に持って行った。

すると…インターホンが鳴り響き、来客が来たことを告げる…

俺は台所から出ると、急いで玄関に向かった。

「おたくに貸した一千万、耳揃えて返してもらおうか！」

玄関のドアの向こうでそんな台詞を吐く馬鹿が居た…

俺はドアコップで外を覗いた。

「あの…アンポンタンめ」

ドアの外には、にやけながらも顔が悪人面になっている野崎…その後ろに、やれやれと言った顔の沖田^{おきた} 縁^{ゆかり}が居た。

沖田 縁…

彼女は俺の家の向かいに住む幼馴染みである。

縁は昔から世話焼きで良い奴なんだが…

これがまた筋金入りの頑固者、何があっても自分の決めた道に行く…そんな奴である。

「朝から近所迷惑だろおが!!」
俺は思い切りドアを開け放った。

……
……

⋮
⋮
⋮

第四話 大会当日…（後書き）

何かどうでも良くなつて来た…

第五話 決死の覚悟

…

…

…

…

…

「是非に及ばず…」

私は、信賴していた家臣に裏切られ、今ここで生涯を自らの手で終えようとしている…

“ 生は死… 死は生である ”

先程から私の頭の中でこの言葉が、浮かんでは消え、また浮かんでは消えてを繰り返している。

誰の言葉かは覚えてはいない、ただ… 何故かとても懐かしい言葉だ…

「フフ、思えば… 人に憎まれるばかりの人生だった…」

私は人を虐げ、またある時は薙払ってきた。

時には“ 魔王 ” “ 赤鬼 ” と称され…
恐れられ疎まれてきた…。

「だがそれも今日までのこと… いざ！」 私は意を決し、脇差しを抜き、そして行きよい良く…

「あなたは…知りたいですか？

…世界の真実を…」

しかし、不意に聞こえた声に私は手を止めてしまった。

「な、何者だ！？」

私は脇差しを構え声を荒げて怒鳴った。

すると、暗がりから声がした…。

「なにものだものにも、クチナシはクチナシなのね？」

私は驚いた、何故かと言えばその声が余りにも幼さかったからだ…。

「くちなし…？」

「アナタは世界の真実を知る権利があるのね。」

世界の真実？権利？何の話をしているんだ？

「アナタには二つの選択肢があるのね、まず一つ目はここで死ぬ…

二つ目は、ゲームに参加する…

この二つなのね。」

げえむ…なんだそれは？第一こいつはなにを言いたいんだ？

「うーんと…そう、この時代で言えば将棋や囲碁と言った物なのね。」

今の話の中で、気になる言葉があったそれは“この時代で言えば”とコイツは言ったがどう言う事なのだろう？

「どうします？参加しますかそれともここで…死にますか？」

どちらにしろ、ここで死ぬくらいなら…

「参加する…」

最期まで、足掻き続けることになるかと私は構わない、其れが私のやり方なのだから…

「それではアナタの、お名前を聞きたいのね…」

私は少し間を置き…

「私の名は…」

………

………

………

………

…

P M 6 : 3 0

岩城家 居間

「もう、じつとしててよ！上手く張り替えないじゃない」

「いてえ、痛いから…痛いです…その痛いのもう少し優しくしてくれませんか縁さん…」

「五月蠅い」

一言で片づけられてしまった、少し複雑な気分である…

「あの…怒ってません？」

「別に！」

「イデデデ！！」

俺は、大会の準決勝まで登り詰めたが、‘高梨’（たかなし）と言う対戦相手に苦戦し、試合時間の五分を使い終えてしまった、そのため三分の延長戦に突入した。

延長戦では先に一本先取したものが勝者と見なされる…。

そのため、俺は是が非でも相手より先に一本取りたかったのだが…

それは相手も同じだったらしく、残り一分になった時…

相手が出した“突き”を寸前の所で交わしたつもりだったが、完全にかわしきれてはならず、相手の竹刀が俺の防具の隙間に入り込み、左耳の下辺りを切ってしまった。

俺は掠めただけと思っていたが、思っていたよりも傷が深かった。そのため道着の左肩辺りが血で赤く染まっていた。

その後、血が止まらず続行不可能と判定され試合は、俺たちの負けで終わってしまった…。

「しかし、お前良くあの突きを回避できたよな」

野崎は丸く小さなお盆に、コーヒークップ三つとミルク、砂糖、スプーンをお盆に乗せ、台所から出て来た。

「俺ならムリだね！断言出来る！！」

野崎は両手を組みながらウンウンと首を縦に降る。

「はい、終わり。」

縁は、救急箱の蓋を閉じて、もと有った棚の上に置きに行く。

「有り難うな縁。」

俺は縁に頭を下げ、礼を言った。

「あつ、いや…その、なんだ？えーと…そう！
旅は道ずれ、世は情けと言うではないか！！
だから気にするな。」

縁はアハハと笑いながら、手をバタバタさせる。

（…照れ隠しか？あれは…）

すると、不意に玄関の呼び鈴が鳴った。

…

…

…

…

第五話 決死の覚悟（後書き）

すみません大変遅くなりました。

次話なるべく早く書き上げたいと思っています。

おおえんよろしく願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2080c/>

ウィークエンド

2011年1月16日06時46分発行